

オブジェクト指向とレトリック

玉井哲雄

佐藤信夫という人を、大変遅れて「発見」した。講談社学術文庫から出ている 5 冊の本はすべて読んだが、どれも素晴らしい。その中で「レトリック感覚」と「レトリック認識」の 2 冊は、ヨーロッパの伝統的な分類に従って、さまざまなレトリックを順に解説している。解説といっても堅苦しい講義調のものではなく、自分で採集した文例を多く引き、また佐藤の文章自身がレトリックに満ち溢れた名文となっていて、楽しませる。

さて、そこに登場するいくつかのレトリックを、オブジェクト指向で現れる概念と結びつけて紹介しようというのが、この小文の意図である。オブジェクト指向と関連づけようなどという魂胆は、さもしいものかもしれない。ただただ、佐藤の技を堪能すればいいようなものだが、思わず自分の専門分野に引きつけてしまうのは、一種の職業病かもしれない。

1. 直喩 (simile, シミル)

森鷗外の『雁』から、「響虫の鳴くような調子でこういうのは」というのを引いて、「その虫の実物を知らず、いや、たとえその鳴き声を聞いたことがあってもそれがその虫の声だと名ざすことのできない現代の都会の若者にとってさえ、じつはこの虫の鳴き声の《直喩》は決して無効となっていないのである。」というのがすごい。こういうところに感心した。しかし、こちらは「現代の都会の若者」ではないが（ただ佐藤よりは 16 歳若い）、「それがその虫の声だと名ざすことのできない」口である。

X を「Y のよう」と表現したとして、Y をその言葉が指す実世界の対象物（つまりオブジェクトだ）そのものとしてとらえて喩を理解するよりも、むしろ言葉としての Y が歴史や文化の中で育んできたイメージを通して理解するのだという。たとえば「狐のように」とか「獅子のように」という場合のことをいっている。

さらに驚くべき、また首肯せざるをえない指摘は、X を「Y のような」と直喩で表現されて、Y を知らない場合、逆に X から Y のイメージを作る、という言語行為があるという。フォームなるほど、という感じである。これは上の響虫の例を引き合いに出して、指摘される。そして、次のような素晴らしい一節がくる。

「《直喩》や、次章の主題である《隠喩》は、《ふたつのものごとの類似性》にもとづく表現である、というのが古典レトリックの定説であった。しかも、現代的なレトリック理論でも、この考えかたはつねに認められている。けれども、ここで私はそれを逆転させ、類似性にもとづいて直喩が成立するのではなく、逆に、《直喩によって類似性が成立する》のだと、言いかえてみたい。」

実は、ここに至るまでに、『雁』だけではなく、太宰治や安岡章太郎や川端康成の直喩の誠に適切な引用がある。さらにこの後、漱石や黒井千次や丸谷才一の例文もあって、それだけでも大変楽しめる。文庫の解説で佐々木健一が書いているように「著者の発見を導いた

論考が、自前の例文、自分で調達してきた例文に支えられている」のが素晴らしい。

きりがないが、はっとさせられる記述をさらに少し挙げれば、「類似性という概念を《どれほど似ているか》…」と考えるくせがあり、「だからこそ、直喩を類似性にもとづく比喩だと言う」が「類似性とは《どれほど似ていないか》ということでもある」というあたり。しかし、これらの議論は面白いが、オブジェクト指向と牽強付会するには捉えどころがなさ過ぎてしまうかもしれない。あえて言えば、次あたりが関係をつけられそうか。

「X をそれに似ている Y によって表現する記述法は、つねに一面的であり、不じゅうぶんである。X をなるべく妥当なかたちで認識しようという方策のひとつとして、X を Y1, Y2, Y3, Y4, … Yn… と、多角的にたとえる工夫に思っていた人がいても不思議ではない。」

2. 隠喩 (metaphor, メタファー)

さて、隠喩、メタファーである。

まず、ヤブヘビという佐藤としては通俗的な例から入り、定義らしいものとして、

「あるものごとの名称を、それと似ている別のものごとをあらわすために流用する表現法が隠喩—メタフォール(メタファー)—である。」という。

続いて、『ロメオとジュリエット』から「君の白鳥がただの鳥だったと」というせりふを挙げ、さらにしりとりのように、太宰の『渡り鳥』から「日比谷公会堂から、おびただしい数の鳥が」と人の群れを鳥と呼ぶ例を引く。この辺が佐藤のうまさであり、またさりげなく博覧強記振りを示すものである。

次にまた、レトリックの歴史を尋ねて古典を引き（といっても 19 世紀と比較的新しい）、それを敷衍してより形式的な定義として「形式を見れば、X と Y というふたつのものごと（あるいは観念）が互いに類似しているとき、Y の名称（あるいは記号）すなわち Y を借用して X を表現すること」が古典時代以来の、まあ平均的な考え方だという。次の言い方のほうがもっと計算機屋に訴えるだろう。「つまり、平常表現ならたぶん X という語句が使われるべきところに Y という語句が《代入》されるのだ…」しかしこの《代入理論》は近ごろの言語理論家のあいだでは評判がよくないという。その理由もいろいろ書いてあるが、それをいちいち追っていたのでは、全文紹介になってしまう。

さて、歴史的には隠喩は直喩を簡潔に言ったもので、それだけ高級な表現とされてきたらしい。しかし佐藤は、「直喩は隠喩の幼稚な変形」という見方に異を唱える。そもそも同様の表現を直喩と隠喩で書き分けるという例文による説明が、いけないのだという。同じ例題が直喩でも隠喩でも了解できるなら、隠喩の方が表現としてすっきりしているだろう。しかし、隠喩が成立するためには、X と Y の類似性が語り手と聞き手の間で共通化されていなければならない。ところが直喩は X と Y の類似性を提案し、類似性を設定するものだから、X と Y がまるで似ていなくてもいいと佐藤はいう。すでに直喩の章でもこの考え方が提出されているが、実に卓見だ。

隠喩はあらかじめ了解できる類似性に基づくから、潜在的にステレオタイプな表現になる

危険があるともいえる。しかし、それは「危険」などというものでなくて、ステレオタイプ化した隠喩が普通の語や表現として使われるようになり、ほとんど隠喩であることも意識されなくなることにより、言語が豊かになるという考え方がある。極端に言うと、ほとんどあらゆる表現が隠喩と見なされる。それがおそらく G. Lakoff 等の立場であろう。佐藤はレイコフの仕事をもろろん知っているだろうが、どの著作でもほとんど無視している。多分、評価していないのだろう。

3. 換喩 (metonymy, メトニミー)

レトリックとオブジェクト指向との関係などとあえて持ち出した大きな理由は、この換喩/メトニミーと次の提喩/シネクドックの存在による。

換喩とは、佐藤が引くモリエの定義によれば「あるひとつの現実 X をあらわす語のかわりに、別の現実 Y をあらわす語で代用することばのあやであり、その代用法は、事実上または思考内で Y と X を結びつけている近隣性、共存性、相互依存性のきずなにもとづくものである。」という。これは分かりにくいのが、典型的な例として挙げられるのが、「赤頭巾ちゃん」である。赤頭巾と女の子は似ているわけではないが、女の子が頭にかぶっている赤い頭巾という「近接性」で代用しているのである。それに対し、「白雪姫」は類似性に基づく隠喩表現となる。

余談だが、「赤頭巾」や「白雪姫」は今や、違和感のない日本語となっている。「頭巾」という語は、日常的にはほとんど死語になっているにもかかわらず、あまりに日本語として馴染んでいるので、原語で何というか、浅学の筆者などは調べてみないと分からない。ディズニー映画のお陰で、英語では白雪姫を Snow White ということだけは、わずかに知っていた。赤頭巾ちゃんはディズニーにも出てこないのに、英語すら分からない。調べてみると、ペローの赤頭巾は Le Petit Chaperon Rouge である。赤頭巾は女の子だが、換喩では当然ながら代替されている語に性は従うようだ、妙なところで納得する。グリムの方は, Rotkäppchen というらしい。それぞれの英訳は Little Red Ridinghood と Little Red Cap である。これが、現在日本語に翻訳されたとしたら、カタカナ名前になる危険が大いにある。

閑話休題。換喩は「近接性」とか「隣接性」に基づくというのだが、なにをもって隣接しているか見なすかは、曖昧である。そこで、古典的なレトリックの学者は換喩をさらに分類整理して、「原因」で「結果」を表現するとか（その逆に「結果」で「原因」を表現するのもある）、「容器」で「内容」を表現するとか、「抽象名」で具体物を表現する、などと列挙した。しかし、佐藤も言うように、これらは思いつきのような列挙に過ぎず、煩雑な一方で、換喩らしい表現でこのリストのどれにも収まりが悪いものがあるという意味で、不足でもある。

「赤頭巾」以外に典型的な例として佐藤が挙げるものは、たとえば蕪村の次の句である。

春雨やものがたり行く蓑と傘

あるいは太宰治の『道化の華』で口髭を生やした刑事を「髭」と呼ぶ例。永井荷風の『墨東綺譚』で古着屋を「禿頭」と呼ぶ例。鷗外の『雁』を再び取り上げて、末造が無縁坂に住ませたお玉という女の家を「無縁坂」と呼ぶ例。これらから佐藤は、頭巾や帽子と人間とか建物と場所は確かに隣接しているが、原因と結果のような縁故関係もまとめて広い意味での隣接関係と呼び、さらにひげやはげ頭と人間のように隣接というより含有と呼ぶべきものも、隣接性に入れる、という。そして「言いかえれば、物の全体と一部分との関係もまた、ここでは広く隣接という名称で呼んでおくことにする」と言うのである。

ここでオブジェクト指向モデルに携わる人は、ただちに「全体と部分の関係」あるいは集約関係(aggregation)を連想するだろう。換喩とは「集約されるオブジェクトの1つで集約するオブジェクトを表現することである」と言ってしまいたい衝動にかられる。

さらにすこし違う話も出てくる。井伏鱒二の『多甚古村』を引いて、「駐在」が巡査を指している例を挙げ、「駐在」という抽象的な語を「具体的な物に流用するという、抽象⇄具体の代入作用による換喩がここに働いている」という。そうなると、このレトリックは「クラスでそのインスタンスを表現したもの」と言えそうである。つまり、換喩には集約関係とクラス/インスタンス関係の両者が使われるということになるだろうか。しかし、普通名詞を個体(インスタンス)化するには、英語などでは定冠詞が使われるし、日本語では「あの」「その」のような連体詞を使うのが一つの方法だ。この「駐在」の例はあまり説得力がなく、他の例は挙げられていない。この後の話を進める都合上は、ここでは集約関係だけに注目しておいた方がよい。

4. 提喩 (synecdoche, シネクドック)

まず、例を挙げよう。佐藤が引くのは井上靖の『比良のシャクナゲ』から「その日一日時折思い出したように舞っていた白いもの」である。この「白いもの」は「雪」の提喩表現である。佐藤の提喩の章は、この例文を冒頭に挙げているにもかかわらず、それに即した説明をする前に23ページも費やしている。その理由は後にしよう。これと似た、さらに通俗的な例は「花」で「桜」を指すものである。

あるいは、芥川の『羅生門』から「白い鋼の色を、その眼の前につきつけた」を引き、「白い鋼の色」が「刀身」の提喩であるという。

これらはあるものを、必要以上に一般的な表現で指すというレトリックである。逆に、必要以上に特殊な表現で指すものもある。佐藤は例として使っていないようだが、「人はパンのみにて生きるにあらず」という時の、「パン」で「食物」を指すような場合である。この類の別の典型例は、好色な男を「ドン・ファン」と呼び、日和見主義者を「筒井順慶」と呼んだりするものである。また、「ナイロン」とか「セロテープ」のように商品名が普通名詞化したのもこれに入る。

これと換喩との違いについて、レトリックの長い歴史の中で混乱と論争とがあったという。その原因は、このような提喩の性質を「部分」と「全体」の関係で説明しようとしたこと

にあったらしい。換喩の中にも「部分」と「全体」の関係があることは、すでに見た通りである。というより、われわれはそれを換喩の定義の中心と見た。伝統的なレトリックの理論では、XとYが隣接関係にあって、XをYで指すレトリック表現に対し、XとYが外部的に独立した存在のときにこれを換喩と呼び、XがYに含まれる（あるいはその逆）のような内部的な包含関係があるときにこれを提喩と呼ぶ、というものが主流だったという。しかし、想像できるようにこの区分はそれほど明確でない。そこで、換喩と提喩の区別をなくするという流派もあるらしい。

佐藤はこの問題に20ページ余りを費やして、全体と部分の関係についての Π 様式と Σ 様式という古くからある概念を持ち出し、解決を図る。木が「枝および葉および幹および根」からなる、というような「および」、論理的な連言、で結合されるのが Π 様式であり、木は「ポプラまたは柏または柳または樺」からなるというような「または」、論理的な選言、で結合されるのが Σ 様式である。もちろん、 Π 様式に対応するのが換喩であり、 Σ 様式に対応するのが提喩というわけである。

オブジェクト指向を少しでも齧った人にとっては、この Σ 様式がオブジェクト・クラスの一般化/特殊化あるいは継承関係に対応することは、一目瞭然である。つまり、換喩=集約、提喩=一般化ときれいに整理できる。ついでに言えば、隠喩=関連(association)となるだろう。ただし、「類似性」という尺度でつけられた関連である。そして直喩は同じ類似性に基づく関連ではあるが、オブジェクト間に生じる自然な関連というよりは、オブジェクト間に作為的に関連の線を引くことによって生まれた類似性ということになるだろうか。

もちろん、オブジェクト指向の技術者は、過去のレトリック学者の頑迷さを嗤うべきではない。何しろ歴史が違う。ヨーロッパのレトリックは古代ギリシャに始まり、中世を経て連綿と続いてきた。そしてこれも佐藤によれば、19世紀後半から20世紀前半にかけて、科学主義、合理主義、実用主義に押され、無意味な装飾として見捨てられた。新たな視点から復活し始めたのは、1960年代に入ってからのことだという。その最近の歴史だけでも、オブジェクト指向をはるかに凌駕する。事实は、このような言語論、認識論の伝統から、オブジェクト指向は直接にせよ、間接にせよ、恩恵を受けたということだろう。

実際、オブジェクト指向に先立つ意味ネットワークやERモデルの時代に、計算機科学の世界でも全体と部分の関係について混乱のあった時がある。意味関連の内の特殊なものとしてis-aという言い方があったが、これがクラス/インスタンスの関係を指す場合と、クラス/サブクラスの関係を示す場合とがあった。後者をa-kind-ofと区別して呼ぶ流儀もあったが、必ずしも統一されていない。さらに、is-aで集約関係を指してしまう人もいた。これにはa-part-ofという言い方もあるにはあったが。

5. おわりに

さて、レトリックとオブジェクト指向をくっつけた話は、これで大体終りである。またまた佐藤によると、ここまで扱った直喩、隠喩、換喩、提喩をまとめて「転義(trope)」とい

うのが普通らしい。これらは「Xを指すのに別のものを指すYという語を用いる」という形式が共通である。これを代入操作と考えると、提喩のある種のもの以外は型の整合性を破ってしまうが、厳密な型検査ができるようではレトリックの妙味はないということであろう。

佐藤の本はさらに続いて、誇張法、列叙法、緩叙法から黙説、ためらい、転喩、対比、逆説、諷喩、反語、暗示引用と豊富に繰り広げられていくが、そこまでオブジェクト指向に牽強付会を続けるのは、野暮というものであろう。